

幼児期における民話の

劇表現の実践的研究

天田 邦子・近藤 壽衛

滝沢みゆき・松林奈緒美

水野 美恵・上野 友美

1. はじめに

本稿では、幼児期における保育への民話の導入と、その劇表現のあり方について、保育実践記録にもとづきながら考察したい。

筆者らは、平成7年度から、幼児教育の場における伝承遊びについての実践的研究をすすめてきた⁽¹⁾。幼稚園での日常的保育の場面で各年齢児の、また異年齢の集団が、どのように伝承遊びとかかわり、楽しみ、遊び体験を豊かにしていくのかを追求している。それと並行し、ほぼ共通の観点から子どもが出会う文化として⁽²⁾、昔話や地域の民話、伝説にも注目し、幼児の発達状況にてらして適していると思われるものを、保育活動に導入していった。地域の自然・社会・文化的環境を生かす、コミュニティとかかわる保育が、いろいろな形で模索されている現在、地域の民話という文化財を生かす保育にも意義があり、必要性があると考えからである⁽³⁾。

一般に民話は、神話に対し、民衆の中から生まれ伝承されてきた説話である。説話は叙情的・伝奇的・教訓的・寓話的・民衆的な要素をもち、やや個性に乏しく芸術性が必ずしも高いとはいえない場合があるが、民衆の意見・嗜好・信仰などを端的に示している文学である。それは、時と場所を定め、想像をまじえたひとまとまりの話となった「伝説」と、伝説が各地のものとまじりあい、時・所を定めなくなった「昔むかし、ある所に……」で始まる「昔話」とに区別される。ここでは、園児たちの身近かな地域の山や川や野にまつわる民話、したがって正確には伝説を語ってみることにした。

それらには、民衆の生活の中から生まれた話として、人間の生き方・感じ方が話の

中にかくされており、子どもたちが話を聞くことでいろいろなことを想像し、心を豊かにたくましく育てる可能性があると考えたからである。岡本夏木は、「子どもは世界をどうとらえるか」、つまり幼児が自分になりて世界をとらえ、ものごとを知っていく時に働く活動の基本的性格を解明しようと試みている⁽⁴⁾。そして、幼児の生活の中に、「世界をとらえる」こととかかわる「認知」「理解」「表現」の活動をみいだしている。幼児の認知のあり方のひとつとして、幼児期には自分の心の中に対象や事象、行為を想定し、それらを操作することができる「表象作用」が可能となり、幼児期の内的世界の中心的担い手としてイメージが形成され、思考に反映していくという。イメージは、行動的・具体的性質を強く宿し、生命感や生活感に富み、自由で個性的な表現を生むのに向いている面と、そのことが同時に客観化や抽象的一般化には不向きで、概念的知識の形成や論理操作とは拮抗する方向に働きやすい面の両面をもつ。子どもが成長するにつれて、イメージ力のいっそうの充実と重なりあって概念的・論理的思考が発達していくことが求められるべきで、「幼児の教育に求められるのは、そうした強靱なイメージ性、つまり後にくる概念化や抽象化のために侵蝕されることのないイメージ活動の基盤を形成すること」にあるという。そして幼児の中にイメージをしっかりと根づかせる要件として、幼児が新鮮な経験を多くもつことと、さまざまな形での表現の機会をもつことの二つをあげている。表現は、言葉によるだけでなく、絵や粘土等の制作、音楽、ごっこ遊び、身体の動きや演技等、できるだけ多くの表現様式の機会をもち、様式間の転換、たとえば聞いたお話を絵で描いたり、見た絵をもとにお話を作ったり、聞いた音楽の感情を踊ってみたりする経験が、イメージを柔軟にし、創造的な契機を作るのに役立つという。

我々が民話を語り、そのイメージを劇表現へ展開させようとした保育のねらいは、これに近い。

また、子どもの遊びの観察やお話づくりの実験結果に基づき、子どもの想像力と創造性を研究してきた内田伸子によれば、物語を聞いたり語ったりという物語をめぐる表現活動も、大人や仲間とのやりとりを通して発達するという⁽⁵⁾。想像の素材としての知識や経験が乏しいうちは、自分のイメージで想像をふくらませることは難しい。大人の感情のこもった声によって、物語を語り聞かせ、読み聞かせる営みを通して、

生き生きしたイメージが与えられ、やがて語りの形式を我がものとし、自分でも語り始める。その際物語は、子どもの発達において単に知識や価値観を伝達するだけのものではない。物語世界に触れることを通して、子どもは現実の知覚世界の制約を超えて、もう一つの世界、虚構の世界を知ることになる。やがて、自分自身でも虚構性を構成するための枠組みや構造を内面化して想像世界を表現することができるようになり、さらに虚構と現実とを自由に扱うことができるようになる。そのような精神力、「想像力を育む活動として、絵本の読み聞かせや物語づくり、劇遊びなどを幼児期に大いに体験させ」たいとしている⁽⁶⁾。

この保育実践で幼児に伝える地域民話は、『坂城町誌』、『更級・埴科の民話』などの民話集から選んだ⁽⁷⁾。それらには、民話といえるまでに成熟している話から、民話の種とでもいえる短い言い伝えまでが採取されていたり、再話として表現をととのえた物語が収録されていたが、特に幼児に向けて話す民話として、次の配慮をした⁽⁸⁾。

①地域の独自の、幼児向け民話を探す。

②地域と結合して伝説化したりして、地域になじみそうなものを利用する。

③出版されている再話の多くが、小学校中学年から高学年むきの表現であり、また生に近い形で採取したものも幼児には理解しにくいので、幼児向けに再話し直す。

そして、十分に民話に親しんだ後、それを表現活動へと発展させていった。その経過をたどりながら、幼児期における民話の語りとその民話を題材とする表現活動について考えてみたい。これらの保育活動を実施したのは、長野県埴科郡坂城町にある坂城幼稚園である。

2. 民話に親しむことから劇表現へ

坂城幼稚園では、昔話絵本や紙芝居のほか、3歳から5歳の各クラスで保育者が日本の民話を話す機会を、朝、昼食後、降園前などの時間帯に設定してきた。3歳児のクラスでも、12月から1月頃になるとお話に聞き慣れて、似たような各地の民話をじっと身をのりだして聞き、しかも喜んで楽しみに聞くようになってきたと保育者が報告している。

子どもの文化的環境の一翼を担ってきた昔話を研究している小澤俊夫は、昔話の語りの特質を「孤立的に語る」、「極端に語る」、「中身を抜いて語る」などの点に見出し

ている。また昔話のなかで語られるさまざまな人間の生き方から、いろいろなメッセージを汲み取ることはできるが、あまり教訓を表面に出さずに出来事を語り、テンポを伝えるべきであるという⁽⁹⁾。よく知られた話ばかりを繰り返し繰り返し選ぶのではなく、もっと積極的におもしろい話を選んで、子どもたちの想像の世界に提供することを提唱し、両親や祖父母、保育者、教師など親しい大人が肉声で語ることに独自の意義があるとする。とくに電波や印刷による情報化が進んだ現代の子どもたちの文化的環境が大きな声や音、にぎやかなはしゃぎ、派手なパフォーマンスに囲まれる場面が多くなっている中で、「耳でじっと聞く文化」の固有性と大切さを指摘している。

私たちは、このような民話や昔話の語りの独自の文化的ジャンルの特性に配慮しながら、幼稚園における保育実践という点から、表現活動につなげていった。

幼稚園の保育実践を方向づける幼稚園教育要領には、私たちの実践に関係する内容として、「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き想像する楽しさを味わう」（言葉領域）、「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり自由に書いたり作ったりする」「自分のイメージを動きや言葉などで表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わう」（表現領域）などの項目が含まれているが、実際の保育の場では、その内容が多様に展開される。この実践は、そのひとつの試みである。

ところで、劇表現も文化の中でもひとつの固有性をもつジャンルである。今回の実践も、民話から各保育室でのごっこ遊び（たとえば「三びきのやぎのがらがらどん」ごっこや、ねずみとねこの戦いごっこ）や、イメージにもとづいて各園児が自由に体で表現してみる（たとえば、「のけ下」の山や雨の身体表現、「梅の木」で年長児が話し合いながら、しぐさや身体的演技を考えていく行動）がまずなされた。その上で、祖父母参観日や発表会に集まった観客の前で演じることがなされ、そのため他者に表現していることが伝わるための、せりふ、身振り、うた、身体表現などの技術を含む練習をしていった。これらの二段階に及ぶ劇表現には、素材や脚本の作り方、表現・演技のしかたにもよるが、3歳から5歳という年齢による発達段階の違いが反映して、以下の記録のように各年齢児で異なった展開を示した。

現在、演劇教育は、ドラマ教育とシアター教育の二方向に分けて考えられているといわれる⁽¹⁰⁾。すなわち、広い意味で劇的な自己表現活動をさし、即興を基本とし、脚

本やテキスト、劇場、観客を必要とせず、個々の内面を見つめ育てることを主眼とするドラマ教育と、上演することを最終目的とし、脚本、テキスト、劇場、観客を必要とし、舞台芸術としての完成度が要求されるシアター教育との二方向であるという。そして幼児期のシアター教育には、順序を記憶して、その作品を繰り返すことができること、相手に伝えるための技術が必要であること、劇構成の要素を用いるなどの高度な技術が必要であること、正式な舞台発表が過度の緊張や圧迫を子どもたちに強いことなどの点において、困難が生じやすく、舞台芸術の要素を用いた発表形式は、幼児の能力をはるかに超えているという見解もある⁽¹¹⁾。今回も保育者たちは、類似の困難や課題に直面しながら、子どもたちの活動の実体をとらえ、実践を修正しながら上演にもっていっている。

3. 劇表現の実践過程

(1) 題材となる民話の選定

各クラス劇表現をする地域民話（正確には伝説）をひとつずつ選んだ。

〈年少組〉 「のけ下」(坂城町北日名の民話)

【あらすじ】北日名に田吾作という猟師が住んでいた。ある日、狩に出かけた田吾作だが、何もとれず、休んでいる時ふと足もとをみると、不思議なことに海にいるはずのほら貝の子どもたちが遊んでいる。珍しいほら貝を持ち帰ろうとすると、たちまち空が曇り、大雨が降り出し、山が鳴り、土手は崩れ、村の道は濁流で川となり、家の近くは一面海のように水びたしになった。その流れの中を、臼のように大きい親貝が「ぼうぼう」と鳴きながら子貝を連れて下っていった。田吾作が子貝をつかまえたところは、ひどいがけ崩れとなって、今伝えられている「のけ下」になった。

「のけ下」は、ストーリーが単純なこと、親子の関係が理解しやすい、身体表現で表現しやすい部分が多く含まれている、登場人物が多いなどの観点から年少組にふさわしい題材として選出された。

〈年中組〉 「大鼠と唐猫」(坂城町鼠の民話)

【あらすじ】大昔、鼠宿に恙虫^{つつがむし}という毒虫がいて、人々を苦しめた。恙虫に喰いつかれると高熱を発し一週間も経たないうちに死んでしまう。そこで古老が寄って相談し、

近くの洞穴の大鼠に頼んで恙虫を食い殺してもらうことになった。大鼠は快く引き受け、3日もたたないうちに一匹残らず退治してくれたので、村人は安心して暮らせるようになり、大鼠に感謝して好物をあげた。ところが、大鼠は慢心し、里に出て作物を食い荒し、さらに人畜にまで害を与えるようになってしまった。そこで困った村人は再び相談し、鼠をとって食べる猫に頼んで退治してもらうことになった。大鼠なので、大きな唐猫に懇願したところ、快諾し、唐猫が大鼠にいどみ大格闘となった。大鼠は、かみつかれて苦しさのあまり、岩を噛み切ってしまい、鼠宿の岩鼻と半過の間を南の湖水がどっと流れ出し、大鼠も唐猫も流され、唐猫は篠ノ井の塩崎でやっとはいあがったものの力つきてしまった。現在、唐猫は篠ノ井に、大鼠は鼠にまつられている。

この話は、ストーリーの明快さ、展開のリズムやテンポのよさ、動物が出てくる話への親和性などの観点から選ばれた。

〈年長組〉 「梅の木」(坂城町北日名の民話)

【あらすじ】ある年の春、加賀百万石の大名、前田の殿さまが参勤交代で江戸詰めが終って、金沢へ帰る途中、行列が岩鼻の難所を越えて坂城に入ってくると、早春のそよ風にのって、梅の香りが強く漂ってきた。北日名の山の中腹にみごとな梅の木があって、殿さまは、この大木を日本一の梅の木だと誉め、この名木を皆で大切にしよう仰せられたという。いまでも、梅の木があるその地は、「梅の木」と呼ばれるようになった。

この話は、自然の美しさや、環境の保存について感じたり考えたりできる題材として保育者が選んだものである。

(2) 民話を題材とする劇表現の目標

〈年少組〉

- 1) 坂城の民話に親しんでほしい。
- 2) その役になりきってのびのびと身体表現をしてほしい。

山…堂々とした様子を表現する
周囲の山をみて形をまねる
雨…だんだん激しく降り、やがて濁流になる動きを表現する

- 子貝…かわいらしく、ユーモラスな動きを表現する
- 親貝…子どもを捕らえられた怒りと、子どもを心配する気持ちを込めて
勇ましさ表現する
- 田吾作…素朴な狩人を表現する

- 3) 簡単なせりふをその役になりきって大きな声で言えるようになってほしい。
- 4) 皆で心を合わせて歌を歌ってほしい。
- 5) 同じ役の子と助け合って演じてほしい。
- 6) すみれ組とたんぼ組の子が合同で演じるので仲良くなっていきたい。

〈年中組・年長組〉

- 1) 民話を通して、自分が住む地域に親しみや興味をもってほしい。
- 2) 自分なりに話の内容を理解し、それぞれのイメージをもち、役になりきって演じてほしい。
- 3) 友だちの表現にも興味を示し、みてほしい。
- 4) 劇をどう作りあげていくのか、どんな物が必要かなどを、自分たちで考えたり工夫しながら、自分で考える力を身につけてほしい。
- 5) せりふを言ったり、歌をうたったり、踊ったりと、表現活動を充分行い、その楽しさを感じとってほしい。
- 6) 劇を作りあげていく過程で、皆でひとつのものを仕上げる楽しさ、協力の大切さ、できあがった時の喜びや満足感を味わい感じとってほしい。
- 7) 大勢の人の前でも、大きな声でせりふを言ったり、皆で協力するなかで、自分の役割に責任をもち、人に頼らず自分で頑張る力を養ってほしい。

(3) 劇表現の前段階における幼児の経験

たとえば、年少児の場合、四月から以下のような多面的な経験を積み重ねており、保育者は、それらを劇表現とかがわらせようと配慮していった。

- 1) 日本の民話に親しむために、絵本の読み聞かせをした。
「いっすんぼうし」「かちかち山」「さるかに」「ももたろう」「おむすびころりん」

など

2) 年長組、年中組の民話の劇を観た。

年長組「ももたろう」7月、「梅の木」10月（坂城町北日名の民話）

年中組「おむすびころりん」5月

3) 「のけ下」の語りを行った。皆で丸く座って昔はいろりを囲んで、お年寄りが子どもたちに昔から伝わる話をしたことを教えた。

4) 季節に応じた身体表現を行ってきた

春…ちょうちょ、花、動物、雨など

夏…カエル、水遊び、花火、小動物など

秋…バッタ、トンボ、落ち葉など

5) 生活に関係したごっこ遊びを行ってきた

ままごと……寝る、食べる、遊ぶなど

役 割……父親、母親、子ども、老人、犬、ねこなど

仕 事……郵便屋さん、消防士、お店屋さんなど

6) 好きな民話の劇を演じた

すみれ組「三びきのやぎのがらがらどん」（北欧の民話）10月

たんぽぽ組「大きなかぶ」（ロシアの民話）11月

7) 皆の前で言葉を言う経験を多くした

聞こえるような大きな声で、ゆっくり、はっきりと

当番活動など

（4）幼児の実態を考慮に入れた脚本づくり

各クラスでは、保育者が日常的保育でみている園児たちの関心、興味、表現能力の発達などの実態をふまえて、脚本を作っていた。

〈年少組〉

- ・身体表現の場面を多くした。
- ・役の心情を表す簡単なせりふを入れた。
- ・身体表現とせりふ以外の情景を簡単な歌にした。

- ・保育者のナレーターの部分は、坂城の昔の言葉（方言）を生かした。
- ・発達を考慮し、ストーリーがわかる程度の簡略な脚本にした。

〈年中組〉

- ・もとの民話にある、むずかしい言葉や残酷な言葉を、やさしい言葉や言い回し、やわらかい言葉に変えた。
- ・台詞だけの展開では、むずかしいようだったため、歌を取り入れて楽しめるようにした。
- ・大格闘の際、岩がさけてその間から水が流れ出すクライマックスのシーンを工夫した。

〈年長組〉

- ・原話の本質を変えず、民話の印象を保てる範囲で、幼児に理解しやすい言葉やせりふで表現した。
- ・展開が単調になり、子どもたちの意欲が損なわれないよう、歌・音楽の表現を混ぜた。
- ・子どもたちの出番、せりふの量に偏りが生じないように構成に配慮した。

（５）幼児の活動への取り組みと保育者の援助

年長組は、10月下旬の祖父母参観日に、年中組・年少組は12月下旬の発表会に、それぞれの民話劇を発表した。発表に至るまでの、民話の劇表現に関する保育活動は、表1～3に記録されているように、取り組まれた。12月の発表会当日には、上演の前に各民話のあらすじが紹介され各クラスの園児たちがどんな気持ちで劇表現に取り組んだのか観客(主として家族)に伝えられた。これは観る者の理解を助け、子どもの成長・発達の姿を読み取ろうという幼児の劇表現の観方を導くものになった。予測されたことであるが、これらの劇表現で初めて地域の民話を知ったという大人が多かった。

年少組 「のけ下」 （すみれ組・たんぽぽ組の合同）		
時 期	保 育 活 動・保育者の援助	子 ども の 様 子
8月下旬	①教師の周りに子どもたちを集め、語りを 行う。本の通りでは難しいので年少児に わかりやすい内容にして語る。身ぶり、	①（すみれ組）初めての素話に興味を示す。 話にのめり込み、真剣な表情で聞き入る。 語り終えると「怖かった。」とため息を

	手ぶりを付けて伝える。	つく子がいた。魂まで揺さぶられたのだと思う。
9月～ 11月	②運動会、作品展などの行事のため、中断。	(たんぼぼ組) 絵を見ながらの読み聞かせを楽しむ段階のため、素話では話の筋を理解することが難しい。
11月下旬	③2クラス合同で、再び語りを行う。	③次第にストーリーを理解していく。2クラス一緒ということで、落ち着かない子もいる。
	④身体表現をする。心も体もリラックスさせる。	④身体表現は、季節の虫や動物などをやってきている。大好きな活動の一つである。
	1) 雨になって動く	1) 雨
	・雨はどんな音をして降るか話させる。	・「ボタンボタン」「ザーザー」などと言いながら手を上下に動かして表現する。
	・小雨の時、だんだん強く降る時、激しくなり川になって流れる時の様子を話させる。	・ピョンピョン跳ねたり、いすの上から飛び降りて表現する。
	・身体で思い思いに表現させる。	・友だち同士、動きのリズムを合わせる子もいる。
	・友だちの動きを見合う。	・川は、勢いよく室内を走り回ったり、泳ぐまねをする子がいる。
	・上手に表現できたこと、友だちと違ったいろいろな動きができたことを認め、ほめる。	・すぐ動きだす子、友だちの様子を見てから動きだす子、動くことに抵抗のある子がいる。
	2) 山のポーズをとる	・全体的には、楽しくのびのびと動けた。
	・ジャングルジムの上から周囲の山を見る。	・おもしろい動きをしているので、「皆、〇〇ちゃんの動きを見てごらん。」等と言うと恥ずかしくなり、やめてしまう子と、益々はりきってやってみせる子がいる。
	・山の形の特徴を話させる。	
	・手や足でポーズをとらせる。	2) 山
	⑤ホラ貝について知らせる。	・指で山の輪郭をなぞる。なぞりながら「でっかい」「大きい」などと言う。両手を広げて見せる。
	・本物が手元にないので、図鑑を見せる。	⑤「貝、食べたことある。」「海に行って貝拾った。」などと、海の話になる。音の話をする、不思議そうな顔をする。
	・山伏が吹くことや、音について話す。	⑥暮らしについては、以前の本の読み聞かせなどで理解していた。
	⑥昔の人々の暮らしについて知らせる。	⑦たんぼぼ組もストーリーに親しみ、思い思いにやりたい役を言う。すみれ組は、「〇〇ちゃんと同じのがいい。」と、友だち関係から役を決める子もいる。
	・山や畑で作物を作ったり、捕物をとっていたことを話す。	⑧喜んで身体表現する子と、どう動いたら
12月上旬	⑦再び語りをし、なっみたい役を言わせる。	
	⑧ストーリーに沿って、中央に出て身体表現をする。	
	・イメージが広がるような言葉がけをす	

12月中旬

- る。
- ・ピアノで、雨、山、ホラ貝の効果音をつける。
- ・動きの特徴を知らせたり、友だちの動きを見させる。
- (脚本を修正する)
- ・子どもたちにわかりやすい内容にする。
- ・身体表現の部分とせりふの部分を決める。
- ・せりふは、役柄を的確に表したもので、発声しやすい、覚えやすいものにする。
- ・せりふ以外で、ストーリーをわかりやすくするために、ホラ貝のテーマ曲、山の歌、雨の歌、話の始まりと終りの曲を作る。
- ⑨劇に出てくる歌を皆で歌う。
- ⑩身体表現の部分を見ている人にも伝わりやすいものにする。大きく動くこと、おおよその位置を決める。
- (再び脚本を修正する)
- ・ナレーター(教師)を入れ、劇の構成を簡単にし、演じやすく、わかりやすいものにする。
- ⑪部分ごとに歌、身体表現、せりふを行う。
- ・田吾十登場の場面、昼食の場面、子貝の踊りの場面、山の登場の場面、雨が川になる場面、親貝が登場する場面、山を崩す場面など、場面ごとに行う。
- ・教師も一緒に行う。
- ⑫劇に必要な大道具、小道具を作る。
- ・親貝、子貝、岩を絵の具で色ぬりをする。
- ・教師が作った弓矢、おにぎりなどを見る。
- ⑬衣装を合わせる。
- ・衣装をつけ、雨は雨の小道具をつける。
- ⑭衣装、小道具を用い、通して劇をする。
- ・演じる場所と控えている場所の間をカラーテープでしきり、自分の出番になるまで横に座って見る。出番の時は中央に出て、前を向いて演じることを話す。
- ⑮ステージ練習をする。

- よいかわからない子と、恥ずかしがる子がいる。
- ・効果音を聞くと、それに合わせて動き出す子が多い。
- ・動きが決まってくる。友だちと同じ動きをするようになる。
- ⑨ピアノの音を聞きながら歌を口ずさむが、まだ歌詞を完全に覚えられない。
- ・ホラ貝のテーマ曲に合わせ、かけ声をかける所は迫力があるので、喜んで行う。親貝は勢いよく前進しながら腕を振り上げる。強くて大きい親貝をイメージして堂々と動く。他の子も一緒にかけ声をかける。
- ・雨の歌のリズムが好かれて、歌う子が多い。
- ・歌詞が覚えられず、あいまいな子がいる。
- あまり長い時間やっていると、疲れて飽きてしまう。
- ⑩繰り返すうちに、動きがはっきりしてくる。
- ・すみれ組とたんぼ組が自然に交流するようになる。名前を呼び合ったり、劇以外の場面で遊ぶ姿が見られる。
- ⑪役の出番を覚え、「次は〇〇だよ」と教える子も出てくる。
- ・大きな声でせりふを言う子もいれば、せりふが覚えられなかったり、恥ずかしくて自信を持って言えない子がいる。
- ・教師と一緒に役になりきって演じる子と、繰り返すうちに飽きてくる子がいる。
- ⑫筆を持ち、喜んで色をぬる。絵の具を使うことが楽しくて仕方ない様子。
- ・田吾十は、弓矢とおにぎりを持ってごっこ遊びを始める。
- ⑬衣装をつけると大喜びで、他の学年の子に見せに行く。急に役になりきって「劇やろう。」と言い出す。
- ⑭自分の出番になるまで待ってられず、飽きてしまったり、友だちが演じているのを見てもらえない。

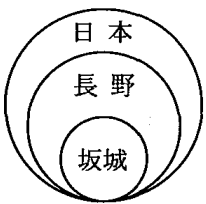
	<ul style="list-style-type: none"> ・前を向いてせりふを言うこと ・大きな口で歌を歌うこと ・役になりきって演じること } を促す	<ul style="list-style-type: none"> ・ほめられると頑張るが、集中力が続かず、疲れてしまう。
12月13日	⑩総練習に参加する。 ・演じたり、他の学年の劇を見る。 ⑪再び練習する。	⑮とてもはりきって、喜んで演じる。ステージの上では役になりきる。年中児に見られていたが、一生懸命演じようとする。せりふと身体表現が大きくできる。歌は会場が広いため、よく聞こえない。 ⑯緊張感があるので、せりふや歌がしっかりできる。
12月21日	⑫発表会。	⑰総練習終了後しばらくは、いろいろな点に注意して練習できたが、その後は飽きやすかった。 ⑱母親が見に来ているので、気になり落ち着かない。出番を待っている子がステージの中央に出てきてしまい、まとまりがつかない場面がある。 ・練習の成果を発揮し、頑張る演じる子と、いつもと違う様子にとまどう子がいる。

年中組 「大鼠と唐猫」		
時 期	保 育 活 動・保育者の援助	子 ども の 様 子
11月～ 下旬	<ul style="list-style-type: none"> ・民話「大鼠と唐猫」の話を聞く。 その話のまま読まず、子どもたちのわかりやすい言葉にして、読み聞かせる。 ・何回か読み聞かせをしていく。 その登場人物なりに声の調子を変えたり、読み方に工夫をした。 ・どんな役をやりたいか聞いてみる。 ・話に親しんだところで配役を決める。 （唐猫3人、村人8人、神ネズミ4人、 ツツガ虫4人 計19人） ケンカにならないように、多くなってしまったところはジャンケンで担任の決めた人数にし、今まで主役等やったことのある子には、同じ役にならないように配慮し、なるべく一人ひとりやりたい役ができるようにした。 ・配役決めに時間がかかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての話なので、興味深くだまって真剣に話を聞いている。 難しい言葉にはすぐに反応を示した。 ・1回話を聞いただけでは、話の内容がつかめない様子だった。 ・何回か話を聞いていくうちに、内容を理解してきたのか、登場人物のまねをしたり、友だち同士話をして会話がはずんでいる姿も見られる。 ・「唐猫」とほとんどの子どもたちが言っていて、他の役はあまり人気がなかった。 ・とても喜んで役を決めようとする。 ・自分のやりたい役に積極的に手をあげ、意欲的だった。 担任が決めた人数より多くなってしまった役があり、他の役をやろうとしなかった。 「ジャンケンをして勝った人」と言うと、嫌だという子がでてきたが、子どもたち同士の説得や担任の話を聞いて、ジャンケンで決めることができた。しかしジャンケンで負けた子は他の役になり、不満で涙ぐんでしまう子もいた。

12月～

- 自分の役の台詞を言う。
皆も一緒に言っていけるようにする。
はっきり、大きな声で言えるように声をかける。
- ひき続いて、練習していく。
セリフばかりでは難しいため、歌を取り入れながら進めていく。
- 昔の言葉や少しきつい言葉を易しくし、言いやすいようにした。子どもたちの中では、昔の言葉も言える子の姿もあった。
- お面・大道具を用意して練習をしていく。
お面は子どもたちの出来ない所をやってあげる。
大道具では岩の形にダンボールを切っておき、子どもたちと一緒に灰色のえのぐをぬる。壁面作り（色ぬり）も進めていく。
- 衣装を役に合わせて選び、衣装を着て練習していく。
- ステージでの練習を進めていく。
遊戯室は広くなるので、大きな声ではっきりと言えるように言う。
セリフも語りかけるような感じで言えるように声をかける。
- 岩が半分に割れて、その間から大水が出てくる表現を何回か行って（戦いの場面も）子どもたちのものにする。
- 全部通して、何回か練習していく。
担任が言わなくても子どもたちがしっかりセリフを言うてできるようになった。
- 昔の言葉にとまどいを見せ、一部の子どもにはなかなか覚えない姿が見られた。
- セリフがまだ自分のものになっていないと自信をもって言えず、小さい声になってしまう。
- 何回か行っていくうちにセリフをだいたい覚えられる子が増えた。
- 歌を歌うのは、好きな方なので、皆で歌にして進めていくことができた。音楽を取り入れて行っていくと、興味もできて親しめるようになってきた。
- 残酷なセリフもあり、セリフを嫌がる子の姿もでてきたが、雰囲気など配慮して続けられるようにした。
- だいたい自分のセリフに自信ができて、大きな声ではっきり言えるようになってきた。友だちがセリフを忘れてしまった時は、他の友だちのセリフも覚えていて、教えてあげる姿も見られた。
- お面ができて、自分のお面があると、劇の練習も意欲的になり、楽しめるようになった。
- 大道具作りの岩作りでは、えのぐの色ぬりを皆で協力して行い、喜んで取り組んでいた。自分たちで道具を作りあげるのはとても楽しいようだった。
- 衣装を着ると、役になりきる姿勢が増し、積極的に劇活動をしていった。衣装について文句も出ず、喜んでいた。
- 部屋で練習しておいたので、ステージになって場所が変わっても自分の出番がしっかり頭にあり、きちんと出てくることができた。
歌を歌う声が小さくなってしまった。担任の声がけなどで、頑張って歌うことができた。
- イメージ通りに表現することができず、どのように表現できているか、他の先生方に見て頂き感想を言ってもらって、参考に考え直していった。
- セリフもしっかり覚えて自信をもって言えた。練習として他の子たちに（他のクラス）見てもらおうと、はりきって行う姿

12月21日	<ul style="list-style-type: none"> 発表会当日、一生懸命やろうとリラックスしてできるよう、声をかけ発表をした。 	<p>があり、ほめられるととてもうれしそうだった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 休んだ子がいたが、休んだ子のセリフも言うことができ、つまずきもなくできた。 頑張って、一生懸命でき満足そうであった。
--------	---	---

年長組 「梅 の 木」		
時 期	保 育 活 動・保育者の援助	子 ども の 様 子
9月下旬	<ul style="list-style-type: none"> 簡単に地理の話をし、自分達の住んでいる所は、日本という国の長野県という中の坂城という所だということを感じとることが出来るようにする。 しつこく説明をしたりしてあきさせてしまわぬ様、理解することを求めず、何となく感じとれる程度にとどめる。 日本ー長野ー坂城と円で大きさ等を示す。 長野ー信濃など昔の呼び方にも触れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師の話に興味深く聞いている。 坂城という名前は、坂城幼稚園という園の名前であって、自分達の住んでいる地名だということを知らない子も多かった。「先生の住んでいる所はどこ?」「おばあちゃんは〇〇町だよ。」などと言ったりして、地名に大きな興味を示しながら、坂城という地名の認識も深まっていったようだ。 日本の中に長野があり、長野の中に坂城があるということが、円を混じえた説明をしたことで分かり易かったようだ。 長野を信濃と呼んでいたということは、始めはよくわからないようであったが、東京を江戸と呼んでいたということに触れると、テレビの時代劇を祖父などと見たことのある子が多く、その中で江戸という言葉がよく出て来るためか分かり易かったらしく、着物を着たり刀をもったりしている時代劇の様子を頭に思い浮かべる子が多かった。
9月下旬	<ul style="list-style-type: none"> 坂城町の話であることを伝え、保育者が作った「梅の木」の紙芝居を読む。 所々で内容の説明を混じえながら、読んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> 全員の子が集中して紙芝居を見ていた。 坂城に伝わる話があることを知り、驚いて興味を示す子と、昔から言い伝えられているということが、具体的によくわからない子とがいた。 なじみ深い話ではないので、不思議そうな感じで見ていたが見終えた後は、楽しめていた様子が子ども達の表情から感じとれた。
9月下旬	<ul style="list-style-type: none"> 祖父母参観日で梅の木の劇の発表すること 	<ul style="list-style-type: none"> 日頃より劇遊びが好きな子ども達なので、

	<p>とを伝え、役決めを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●友達と相談するのではなく、自分のやりたい役を自分で考え、自分で決めるように言葉掛けをする。 	<p>劇という言葉聞いて大喜びであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●殿、家来という役柄も、江戸時代から時代劇を想像したことや、紙芝居の絵を見て分かり易かったらしく、スムーズに自分のやりたい役を選ぶことが出来た。 ●梅はかわいいという印象が強いらしく、女の子に人気があった。 ●ひとつの役に人気が集中し過ぎるということもなかった。
10月 第1週目	<ul style="list-style-type: none"> ●劇遊びを始める。 ●時々、紙芝居を読んだり、読み聞かせをしたりしながら物語の内容をつかんでいくことが出来るようにする。 ●台詞は言葉を何回も繰り返し言って覚えるのではなく、繰り返し演技しながら(部分的ではなく全体を通して)覚えていけるように配慮し、教師自身が覚えさせようとしたり、感情的になったりして、焦りを子ども達に感じさせないよう、気長に指導していくことを心掛けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●皆、喜んで劇遊びに参加する様子が見えた。 ●早く自分の出番にならないかと楽しみにしている子が多い。 ●劇の練習をまだ始めたばかりで、次は誰の出番であるかということを教師側がまだ伝えていない部分でも話の内容をすっかり理解し、「次は農民の出番だね。」などと言って、自分達で劇を進めていく姿も見られた。 ●台詞はなかなか覚えられないようだが、劇遊び自体は楽しんでいるようだ。 ●「～じゃ。」「～だのう。」などと普段使い慣れない言葉の台詞がなかなか難しく、覚えられない傾向にある。 ●劇遊びが楽しくて仕方ない子は、友達の出番もよく見ており、友達の台詞までしっかりと覚えてしまった子もいる。
10月 第2週目	<ul style="list-style-type: none"> ●前回、桃太郎の劇を行った時よりも台詞を覚えることが難しいようなので、劇と全く同じ流れ(台詞)で紙芝居や素話を帰りの活動等の時間を使って繰り返し読み聞かせることによって、親しみをもって欲しいと願った。 ●自分の出番でない時も、友達の演技を見たり歌を歌ったりして参加することの大切さを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●帰りの活動等を使って、紙芝居を見たりすることにより親しみをもつよりもかえって飽きさせてしまった。1日のうちで劇遊びをする活動が主となる中で、別の時間にまでまた同じ題材の話聞くということで、活動の流れが単調になってしまったようだ。 ●友達の出番の時にも出番でない友達と話をしてしたりして、劇に参加しない子が増え、集中しない様子の見られる子が増えた。
10月 第3週目	<ul style="list-style-type: none"> ●子ども達が、劇「梅の木」に飽きかけてきている様子が見られたので、指導の仕方を少し変化させ、新鮮みがもてるよう 	<ul style="list-style-type: none"> ●少し劇の様子を変えたり、台詞を減らしたり、台詞の言いまわしを変えたりすることにより、演じやすくなったようで、

	<p>にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●劇の構成をやや変える。ただし、今まで覚えてきたものが無駄になってしまわぬよう注意し、大幅に変えることは避ける。 ●劇の大道具、小道具作りを行い、気分転換をはかり、また劇への意欲を高めて欲しいと願う。 ●教師自身が大げさに演じて笑わせたりしながら、劇への楽しさを高め、意欲的に劇遊びに参加して欲しいと願う。ただし、教師の演技方はひとつのヒントにとどめ、自分達で演技方を考えるきっかけとなるよう留意する。 	<p>先週よりも意欲的な様子が見られるようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●大道具、小道具は、劇の内容を皆で振り返りながら自分達で必要なものを考え、喜んで作ることが出来た。バック画の色ぬりでも、絵の具を使うことが嬉しくてたまらない様子で、ぬる場所を友達同士で分担したりしながら、楽しく行っていた。とても良い気分転換になり、また自分達で作ったものを劇に使うということからも劇の意欲が高まったようだった。 ●教師の演じる姿を見ることは、子どもにとってとても楽しいことのようにだ。喜んで見て、全員の子が劇に集中するきっかけとなることも出来た。またこの部分は自分達で考えてみようという表現方法の課題を出されると（ただ台詞を棒読みするのではなく、言い方を変えたり仕草をつけたり）教師の演技方を参考にしながら考える様子も見られるようになった。 ●10月第3週目の末に、ようやくやっとひと通り劇を通すことが出来るようになった。
10月 第4週目	<ul style="list-style-type: none"> ●ようやく劇が形になってきたので、仕上げの段階としての練習を始める。 ●教師の表現方法をおしつけることなく、出来るだけ子ども達の感じたように演技することができるように心掛ける。 ●途中で台詞などが分からなくなってしまったりしても、すぐに教師側で手助けをしたりせず、多少間が開いてしまっても子ども達同士の力で劇が進められるよう見守り、待つようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●10月第3週目より劇への意欲が再び戻り、喜んで行えるようになって来た。 ●子ども達なりに自分で考えたり、友達に助言してもらったりした表現方法で演じてみる姿が見られるようになった。また友達の表現方法を認め合う姿も見られるようになった。一方で、恥ずかしいという気持ちから思いきり演技をすることが出来ず、台詞を言うことがやっとの子もいたが、それぞれにその子なりに頑張っている姿が多く見られた。 ●途中で台詞を忘れてしまっても何とか自分で思い出そうとしたり、まわりの子が教えてあげている様子が見られた。
10月 第4週末	<ul style="list-style-type: none"> ●祖父母参観日において、発表をする。 ●練習中は教師に頼らないようにとの指導をしてきたが、本番前には何かあっても教師がついている、友達がついているから大丈夫といった内容のことを話し、安心 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先生、私、間違えたらどうしよう…」などと不安気な子と自信たっぷりの子と様々ではあったが、衣装をつけたりして、どの子も張り切って劇の発表に臨むことが出来た。

	<p>して本番に臨めるように配慮した。 （実際は口出しせず、見守るつもりであったが）今まで頑張って練習してきたことを認め、自信を持てるようにした。</p>	<p>●練習通りには行えなかったものの、本番にしては比較的にリラックスし、伸び伸びと発表することが出来たように思う。 ●楽しかったという感想が子ども達の中から多く聞かれた。</p>
--	---	--

（６）実践の反省と考察

実践した保育者の反省・考察は、次のような内容であった。

〈年少組〉

- ・民話に親しむよい機会になった。
- ・読み聞かせや語りを続ける中で、言葉をじっくり聞く態度が養われた。
- ・劇化するまでに、総合的な学習ができた。
- ・すみれ組とたんぽぽ組が交流するきっかけになった。
- ・年少にとり、民話の劇は難しい問題であった。聞いたり、観たりして楽しむことは容易だが、劇として演じるものは普段のごっこ遊びの延長であるものの方が、無理なく楽しんでできるのではないか。
- ・年少にとって表現しやすい身体表現を中心に劇化したが、年少児における身体表現は、繰り返し練習し演技することがむずかしく、盛り上がった気持ちを維持し、一層盛り上げていくことが難しかった。
- ・配役を決める時点では、子どもがのり気で大丈夫と思っていたが、結果をみると３歳児にとっては見せる劇はまだ難しいと思われた。劇の構成が観客に伝えられたか疑問が残る。
- ・しかし、劇の役になりきったり、つもりになって表現したり、歌や身体表現を楽しむことはできたと思う。その意味では、３才児なりの表現のしかたに驚かされ、感心する場面もあった。

〈年中組〉

- ・地域の民話に親しませ劇活動にしていくのは、ほかの劇活動より難しかった。
- ・劇の練習が進む中で、役柄とせりふにどうしてもなじめない女兒がでてきてしまい、歌を入れたり雰囲気づくりの工夫をしたが、気持ちを変えることはできず、

どうしたら、その子の気持ちに沿って無理なく劇表現活動にとりくんでいったか、その子の欲する表現形式や表現のしかたを劇の中に入れられたか、さらに工夫すべきであったと反省する。

- ・戦いの表現が難しく、もっとイメージを豊かにもって、子どもたちにも伝えられれば良かった。岩がさけて水が流れ出す場面は、幼児のイメージと保育者の発想が結びついて成功であった。
- ・劇表現のなかで、子どもなりに考えて、せりふを言おうとしている点に意欲が感じられた。協力しあう姿、せりふを忘れた友だちに教えあう姿、皆で心をあわせて歌う姿などがみられた。
- ・発表会では、子どもたちの体の動きやせりふにも、アドリブが出て楽しく演じられた。当日にはむしろ、せりふを大きな声で言えたり、歌もしっかりのびのびと歌い、皆で一つの劇を仕上げることができた。
- ・発表が終った後にも、「先生、本当に恙虫っていたの」などと、教師に問いかけたり、子ども同士で話す姿がみられ、この民話への関心が深まったようだ。

〈年長組〉

- ・あまりなじみのない地域の民話が題材だったので、子ども達も少々戸惑い気味で、親しみをもたせるまでがとても苦労であった。何回も繰り返し読み聞かせることで親しみを抱いていった欲しいとも願ったが、かえって飽きさせてしまい、逆効果であった。繰り返し読み聞かせるということは、長い期間をかけて10回、20回と読み聞かせることは効果的だと思うが、10日間で10回など短期間で繰り返し読み聞かせても、親しみをもたせるという面においてはあまり効果がないと感じた。民話を取り上げるならば、日頃から最低でも4月から少しずつ読み聞かせをしておく必要があったと反省した。
- ・民話は言葉の言いまわしなどが普段の言葉と少々違うため、台詞は覚えにくかったようだ。言いまわしを現代風にすると、民話らしくなくなってしまうのではないかと思ったりもしたが、子ども達がやりやすいように変え、その中で子どもなりに表現していくということも必要だったのではないかと感じた。そうする中で少しずつ楽しみや意欲も増していったようだ。

- ・表現方法としては、劇の構成を伝えることに一生懸命になりすぎてしまい、教師側の表現を伝えすぎ、子どもなりの表現が必ずしも十分に出来なかったところもあった。
- ・苦勞した部分、難しかった部分は多くあったが、子どもの実態にあわせて少しずつ劇の構成を変えていくことにより、劇を楽しみ、民話に少しずつ親しんでいくことが出来た。

4. まとめにかえて

1) 年少・年中・年長の各クラスとも、地域の民話に親しみ、劇表現していくことの難しさをあげていた。これは、地域民話が保育者はもちろん子どもたちにとっても、初めて聞くお話であったため、その構造、あらすじ、主題を理解したり、おもしろさやこわさを発見したり、それに基づきイメージをふくらませ、場面を映像的あるいは空間的に想像していくことが難かしかったためかもしれない。また、今回の民話に出てくる恙虫やほら貝を実際に見た子はほとんどいないであろうし、かつての人々の生活の中にあった恙虫や鼠の害を深刻に受けて困った経験もないだろう。梅の木に登場する旅の途中の街道の難所というイメージも、交通手段の発達した現代の子どもにとっては、理解しにくかったにちがいない。このように、子どもたちの現代生活から類推しにくいことがらも民話には多く含まれることも、その原因のひとつと考えられる。

また、地域民話には、まだ「民話の種」のような形で伝えられているものもあり、お話の完成度からみて、再話に工夫を要するものも含まれるように思われる。そう考えると、どの民話を選ぶかの選択のしかたや、保育者の語りが幼児のイメージや想像をかきたてるものになっているかどうかは、大きなポイントになってくる。

しかし、幼児たちは、限られた自分たちの生活経験や情報をもちよって、年長組の例が示すように江戸時代に地域を通った殿さまの行列を理解し、表現していている。また年中組は、劇活動後にも強烈な印象をもったであろう恙虫や大きな唐猫を思い描き話題にし、お話へのこだわりをみせている。その意味では、前述の小澤俊夫がいうように、よく知っている昔話だけでなく、まだ知らない多様な話を語り、

イメージ化し、表現していくことの可能性と意義はあるように思われる。

そして保育者は、子どもの理解や認知、イメージ、表現の発想・技術・意欲・得意な方法・分野などの点で子どもの発達の実態をみながら、劇の構成や脚本を修正しつつ活動を進めており、この調整がいわば子どもたちが演じるとき、それを自分の劇表現とすることができるかどうかを左右する重要な要素であると思われる。

- 2) コミュニティと保育という点から、この実践をみると、題材はいずれも現在も地名として残っている場所のものであった。いかにもそれらしく切り立った岩壁の景観が残る鼠の岩鼻や、山肌がむき出した「のけ下」、山の中腹に数軒の家がある「梅の木」などが存在している。そのような自然と歴史的な人々の生活から生まれた民話は、幼児期の地域にかかわる文化的・社会的経験の原風景となることも期待される⁽¹²⁾。当日は、保護者会の役員による地域民話「中之条の三吉キツネ」の劇も発表され、親や祖父母など幼児の家族の間にも地域文化への関心が高まった。

- 3) 幼児の年齢すなわち発達の状況と劇表現のあり方については、実践した保育者からもいくつかの課題が出された。

年少児では、観客の前で演ずるのはむずかしいのではないかという疑問、また、きちんと伝えるための演技や身体表現の練習も何度も繰り返すことが、無理ではないのかという点である。役になりきったり、ふりをする表現、大雨や川・山などの身体表現には保育者も驚くほどの表現能力がみられたものの、発表会やそれに向けた練習では、そののびのびとした表現が失われてしまうという問題であった。保育者は、ごっこ遊びの延長としての楽しめる劇表現が、いかにしたら可能かと問題提起している。

年中組でも、少数ではあるが、役になじめない女兒や発表に際し緊張した子の例などが報告された。このような緊張や圧迫感、劇の舞台発表だけに限らず、運動会や当番活動や、新しい経験をするときなどに抱くものだと思うれるが、このような情緒や内面の状況にどう対処していくのか、こどもがその子らしい対処のし方をみつけ、それなりに克服して、「やれる自分」という自己概念をもつ過程に、保育者がどうかかわるのか、問われてくる。また、そうした対処能力がどの年齢ぐらいで可能であるか及びそのプロセスについても、さらに研究する必要がある。

年長組の保育者からは、何度も読み聞かせたり、何度も練習を繰り返す過程で、飽きてしまったという子どもの様子が出された。脚本を手直ししたり、大道具・小道具づくりなどの変化ある活動を入れると再び意欲を高める様子が伺えた。また、劇の構成を伝えることと、子どもなりの表現を十分生かすことの調和の難しさも課題であった。

- 4) 年中児・年長児ともに、クラスの幼児たちが一つの劇作品に向かって協力して作りあげていく様子が観察されている。年中から年長にかけて4・5・6歳の幼児たちは、知識や技術への関心を高め、予想や工夫をしながら目標達成のための意識的な努力や意識的な行動統制が可能になってくるといわれている。いわば練習による学習をフィードバックしながら進め、やれることを積極的に増やしていく。高木和子によれば、4歳を過ぎる頃から、目標への見通し、失敗してもあきらめないこと、練習という努力を特徴とする「継承型」の学びができるようになるという。⁽¹³⁾そしてこの年齢にはまた、友だちとの協同と競争の心を背景に、友だちと一緒に作りあげる世界を楽しむようになるという。一つの劇表現を協同で作りはあげることは、この年齢の子どもたちにとって、それが内的に動機づけられたとき、つまり意欲とやる気が見えたときには「継承型」学びや、友だちとの世界を体験する場となりうるかもしれない。

〈付記〉この研究は、上田女子短期大学児童文化研究所の研究助成を受けています。

【注】

- (1) 天田邦子・近藤壽衛他「幼児教育と伝承遊び・年中行事」上田女子短期大学児童文化研究所『所報』第18号 1996年3月号
天田邦子「保育の現場における伝承遊び」日本保育学会第49回大会研究論文集 1996年5月
近藤壽衛「伝承遊びについて」『切抜き速報 保育と幼児教育』ニホン・ミック 1997年1月
- (2) 1980年頃の子どもの文化状況を多角的にとらえた、子どもの文化研究所編『子どもの文化 未来へのかけ橋』（1980年 童心社）は、さまざまな児童文化・保育

文化の状況把握や提言を含んでおり、現在からみても示唆に富んでいる。また、岩波講座『幼児の生活と教育、2生活と文化』（1994年）は、歌・音楽・わらべうた・絵本・テレビ・アニメとマンガ・コンピュータ・玩具の各分野について、幼児期の文化として取り上げており、現在の一般社会的状況として参考にした。

- (3) 天田邦子「コミュニティとの関連を考える保育内容と方法」 大森隆子他編『人間を育てる—子どもの発達援助論』 1996年 宣協社

- (4) 岡本夏木「子どもは世界をどうとらえるか」『講座 幼児の生活と教育4 理解と表現の発達』1994年 岩波書店

岡本は、乳幼児の認知活動を、生命維持に必要な生得的ともいえる機制・情動や身体さらには行動全体と結びついて働く認知、また子どもの行動のほとんどが対人関係的な場で営まれるため、認知もその対人関係を背景に働くこと、対象となる事物や事象の中から一番印象的な特徴部分を抜き出し、対象全体をとらえる代表作用の発達、知覚、対話の中の思考・外界のとらえ方と表裏一体となる自分自身の行動の意味づけなどと並んで、幼児期の内的世界の中心的担い手となるイメージについて言及し、幼児期の生活にみられる認知行動の特性を描いている。

- (5) 内田伸子『想像力の発達——創造的想像のメカニズム』1990年 サイエンス社
同「子どもの想像世界——物語ること、生きること」黒坂三和子編『子供の想像力と創造性を育む』1989年 思索社

- (6) 内田伸子「お話づくり」『講座 幼児の生活と教育4 理解と表現の発達』1994年 岩波書店 P233-234

- (7) 『坂城町誌』上巻（自然編、民俗編）1979年 坂城町誌刊行会

信州文学会編（浅川かよ子）『更級、埴科の民話』1976年 信濃教育会出版部

長野県国語教育学会編『長野の伝説』1980年 日本標準

藤沢衛彦編著『信濃の傳説』1917年 日本傳説叢書刊行会（すばる書房 名著復刻版による）などを参考にした。

- (8) 大日方寛「身近な話なら子どもの心にしみわたる」（『おさなご』1996年7月 教育企画センター）の論稿を参考にした。

- (9) 小澤俊夫『昔ばなしとは何か』1990年 福武文庫

小澤俊夫「心をはぐくむ昔話」『げんき』No.33エーデル研究所

(10) 北村恵子『音楽表現の世界』1994年 樹芸書房 P29-31

(11) 同上書 P37

(12) 田丸敏高「身のまわりの社会を知る」

『講座 幼児の生活と教育4 理解と表現の発達』1994年 岩波書店

同『子どもの発達と社会認識』1993年 法政出版

(13) 高木和子「個性のあらわれ——3歳児から5歳児まで」『講座 幼児の生活と教育3 個性と感情の発達』1994年 岩波書店